

昔むかし、ある国で、竜が、太陽と月と星を、空から盗み出して地下の国に隠してしまいました。王さまは、困り果てました。

この国に、コースチンという男がいて、息子が三人ありました。息子たちは三人とも、たいへんな勇士でした。王さまは、家来に命じて、コースチンの末の息子を呼んでこさせました。

「竜のやつから、太陽と月と星をとり返して来てはくれまいか」

末の息子は、

「ぼくには無理です。二番目の兄さんに頼んでください」と答えました。

王さまは、二番目の息子と呼んでいいました。

「竜のやつから、太陽と月と星をとり返して来てはくれまいか」

二番目の息子は、

「ぼくには無理です。上の兄さんに頼んでください」と答えました。

王さまは、上の息子と呼びました。

「竜のやつから、太陽と月と星をとり返して来てはくれまいか」

上の息子は、

「分かりました。では、わたしたちに馬を一頭ずつください。馬の群れを三つ追い立ててくだされば、わたしが馬を選びましょう」といいました。

そこで、三つの馬の群れが追い立てられました。上の息子は、ひとつ目の群れから、三本足に翼がひとつのやせ馬を選び出し、

「これは末の弟に」といいました。そして、ふたつ目の群れから、二本足に翼がふたつのやせ馬を選び出し、

「これは、中の弟に」といいました。最後に、一本足に四つの翼で一番だめな馬を選び出して、自分の馬にしました。

三頭の馬は、

「コースチンの息子さん、わたしたちを広い野原に三日間放して、新鮮な草を食べさせておくれ」といいました。その通りになると、馬たちは、すばらしい駿馬しゅんめになりました。

三人は、馬に乗って丘に登りました。そして、矢を一本ずつ射て、矢の落ちた所に向

かって出発しました。

馬でどんどん進んで行くと、竜の館やかたに着きました。そこに、末の息子の矢が落ちていました。三人が館に入っていくと、竜は留守で、食卓にお酒や豪華ごうかな料理がならんでいました。三人はごちそうを食べて、ひと休みしました。それから、末の息子が、館の前の橋の所で、竜が帰って来るのを見張ることになりました。

末の息子は、兄さんたちにいいました。

「ぼくの手袋てぶくろと鞭むちを置いて行くよ。そこから汗あせがしたたったら、ぼくがやられそうなんだから、そいつらを放してやってくれ。手袋と鞭はぼくに代わって戦たたかってくれるだろう。もし血がしたたったら、そのときは、馬を放して兄さんたちも駆けつけてくれ」

末の息子は、出かけて行って、橋の下に座りこみました。

夜中に突然、大地がゴロゴロとどろいて、三つの頭の竜が、馬に乗って帰ってきました。橋の上にさしかかると、馬が足を止めとめました。竜は、

「こんちくしょうめ、どうして先へ進まないんだ」とさげびました。

「橋の下に、コースチンの息子が座っているのだから、どうして先へ進めましょう」と、馬が答えました。竜は、

「まず手始めに五年ほど、豚の世話をさせておけ。そうすりゃからすがやつの骨をこへ届けてくれるだろうよ」といいました。そのとき、末の息子がとび出して、

「勝手にいってろ、勇士がみずからお出ました」とさげびました。そして、竜をさんざんに打ちのめして、舌をチョンと切り取ってポケットにしまいました。末の息子が館にもどると、兄さんたちはぐっすり眠りこんでいました。

あくる朝、三人は二番目の息子の矢を探して出発しました。しばらく行くと、二番目の竜の館に着きました。そこに矢が落ちていました。竜は留守で、食卓に前よりもっと上等のお酒や豪華な料理がならんでいました。三人はごちそうを食べて、ひと休みしました。今度も末の息子が見張りに立ちました。

「ぼくの手袋と鞭を置いて行くよ。そこから汗がしたたいたら、そいつらを放してやってくれ。もし血がしたたいたら、馬を放して兄さんたちも駆けつけてくれ」

末の息子は出かけて行って、橋の下に座りこみました。

夜中に突然、大地がゴロゴロとどろいて、六つの頭の竜が、馬に乗って帰ってきました。橋の上にさしかかると、馬が足を止めました。

「こんちくしょうめ、どうして先へ進まないんだ」

「橋の下に、コースチンの息子が座っているのだから、どうして先へ進めましょう」

竜は、

「十年ほど、豚の世話をさせておけ。そうすりゃからすがやつの骨をここへ届けてくれるだろうよ」といいました。そのとき、末の息子がとび出して、

「勝手にいってろ、勇士がみずからお出ましだ」とさげびました。戦いが始まりました。

館では、すぐに手袋と鞭から汗がぼたぼたしたたりました。ところが、兄さんたちは、ぐっすり眠りこんでいて目を覚ましませんでした。末の息子は、ようよう竜を打ちのめして、舌を切りとってポケットにしまいました。

あくる朝、三人は上の息子の矢を探して出発しました。しばらく行くと、三番目の竜の館に着きました。そこに矢が落ちていました。竜は留守で、食卓に前よりもつと上等のお酒や豪華な料理がならんでいました。三人はごちそうを食べて、ひと休みしました。

今度も末の息子が見張りに立ちました。末の息子は、

「今夜は眠ったりなんかしないで、手袋と鞭から血がしたたりはじめたら、急いでぼくを助けに来てくれ」といって、出かけて行きました。そして、橋の下に座りこみました。

夜中に突然、大地がゴロゴロとどろいて、十二の頭の竜が、馬に乗って帰ってきました。橋の上にさしかかると、馬が足を止めました。

「こんちくしょうめ、どうして先へ進まないんだ」

「橋の下に、コースチンの息子が座っているのだから、どうして先へ進めましょう」

「十五年ほど、豚の世話をさせておけ。そうすりゃからすがやつの骨をここへ届けてくれるだろうよ」

そのとき、末の息子がとび出して、

「勝手にいってろ、勇士がみずからお出ましだ」とさげびました。戦いが始まりました。

館では、すぐに手袋と鞭から汗がぼたぼたしたたり、それがみるまに血に変わりました。馬が馬屋で大あばれして館がぐらぐらゆれました。そこでやつと兄さんたちも目を覚ましました。手袋と鞭と馬を放してやると、自分たちも急いで助けに駆けつけました。

手袋はうなり、鞭は宙を切り、馬は大あばれして、三人は竜をさんざん打ちのめし、火あぶりにして、灰を空にまき散らしてしまいました。それから、地下の国に下りて行って、太陽と月と星をとり返して空にもどしました。

三人は、故郷ふるさとに向かいました。道のとちゅうで、末の息子が、

「手袋と鞭を竜の館に忘れてきてしまったぞ」といいました。そして、オオタカに姿を

変えて、三番目の竜の館に飛んでもどりました。

竜の館では、三匹の竜の女房たちと子どもたちが集まっていました。末の息子は子ねここに姿を変えて、窓の下でじやれてみせました。竜の子どもたちは、

「なんてかわいいんだろう。つかまえて来よう」といいました。竜の女房たちは、

「いけない、お待ち。そいつはきつとわたしたちの敵だよ。ハチミツをぬったパンと、毒入りのパンをやってみよう。毒入りパンを食べたらわたしらの友だちだし、ハチミツのほうを食べたら、敵だよ」といいました。そして、窓から二きれのパンを投げました。

子ねこは、すぐさま毒入りパンを食べました。

「こいつはぼくらの友だちだ」

竜の子どもたちは、子ねこを館に入れました。

夜になると、十二の頭の竜の女房が、上の娘にいました。

「おまえは、コースチンの息子たちの先回りをして、ベッドに姿を変えて待っているんだ。おまえの上に横になったら最後、やつらはあの世行きさ」

それから、二番目の娘にいました。

「おまえは、りんごの木になって待っているんだ。実をかじったら最後、やつらはあの世行きさ」

三番目の娘にはこういいました。

「おまえは、道ばたの泉に姿を変えて待っているんだ。水をひと口飲んだら最後、やつらはあの世行きさ」

末の息子は、この話をすっかり聞きました。そして、自分の手袋と鞭にじやれつきました。子どもたちは、それを見て、

「父さんをやった憎いやつ。捨ててしまおう」といって、手袋と鞭を窓の外に捨てました。末の息子は、外に出て手袋と鞭を拾い上げると、オオタカの姿になって飛び去りました。

末の息子は、兄さんたちに追いつき、三人で馬を飛ばして故郷に向かいました。

しばらく行くと、むこうにやわらかそうなベッドが見えました。兄さんたちは、ベッドに突進しました。末の息子は、兄さんたちを追い越して、ベッドに切りつけました。たちまち、竜の娘は死にました。

またしばらく行くと、りんごの木があつて、よくうれた実がひとりで落ちていました。末の息子は兄さんたちを追い越して、りんごの木に切りつけました。二番目の娘も

死にました。

少し行くと、すばらしい泉が見えてきました。三人はもう何日も水を飲んでいませんでした。兄さんたちは泉めざして突進しました。末の息子は、兄さんたちを追いついて、泉に切りつけました。末の娘も死にました。

竜の女房は、娘たちが死んでしまったことを知って、三人の後を追って飛んできました。口をくわつと開けると、上あごは天まで届き、下あごは地面に付きました。

末の息子は、地面に耳を付けて、

「おい、竜の女房が追ってくる」とさげびました。三人は馬に鞭打って、走りに走りましました。もう少しで追いつかれそうになったとき、鍛冶屋かじやの小屋を見つけました。三人は中に駆けこんで、かんぬきをかけました。

竜の女房は、

「ここをお開け。さもないと、小屋もろともひと飲みだよ」とどなりました。鍛冶屋は、「とびらをなめてごらん。熱いやつをごちそうするよ」といいました。竜の女房は、たちまちとびらをなめつくして、小屋の中に舌をのばして来ました。鍛冶屋はまっかに焼けたやつとこで舌をはさんで引っぱり、竜の女房を動けなくしました。それから、竜の女房の体に鋤すきをつけて、谷間を耕しました。海辺まで耕し終わったとき、竜の女房は、鍛冶屋にたずねました。

「あんたには、父親がいたかい」

「いたよ」

「草刈り人を雇やとっていたかい」

「雇っていたよ」

「ひと息つかせてやっていたかい」

「もちろんさ」

「じゃあ、わたしにもひと息つかせておくれ」

竜の女房は、ひと息ついて、水をがぶがぶ飲み、とうとう、お腹がはじけてしまいました。

コースチンの三人の息子は、ぶじ故郷に帰りつきましたとさ。

村上郁